

第37回 うつのみやこども賞だより

令和2年度 4回

市内5・6年生の選定委員さんたちが、月に4冊の本を読んで、年間で一番人気の高かった本に「うつのみやこども賞」を贈っています。

《今月選ばれた本》

『ぼくたちの緑の星』

小手鞠 るい／作（童心社）



令和2年9月6日

うつのみやとしょかん
Utsunomiya city library

～読んだ本の感想より～

- 空良たちがいた星は地球の昔の姿か、未来の姿か。また、「全体目標」のために心をうばっていくことは必要なのか、と自分たちのことも考えさせてくれる。やっぱり戦争はこわい。
- 次々と禁止されて、色をなくしていく生活。平和な緑の星「地球」であるためにしっかり考えなきゃと思った。
- 夏樹さんや春香ちゃんと出会って、色や名前をとりもどしていったり、シドウィンにいわれ、本をもやしたり、主人公のいる世界はけいむしょみだいなと思いました。色や名前は大切だなと思いました。
- 戦後75年という節目だから戦争にもっと目を向けてほしいと思った。
- 自然は大せつだとおもいました。

『雨女とホームラン』 吉野 万理子／作（静山社）

- 第6章「見えないもの」の先生と里桜ちゃんの話が心に残りました。語り手が章によって変わるので面白く読めました。
- このお話は、全てを信じすぎちゃダメ、小さなことでも誰かが傷ついてしまうことを教えられた気がした。
- 占いが大好きな里桜と、野球が大好きな和馬とのかんけいがぼくにとって印象に残っています。
- 「負けおばさん」に負けないように努力して無事試合に勝てた後のかんとの言葉がかっこいいなと思いました。
- いいこと悪いことがたてつづけでおこるなど、とてもドキドキしました。

『雷のあとに』 中山 聖子／作（文研出版）

- ハルおじさんが「好きなことは大切にしようがいい」といって、睦子がそうしようと思ったように、私も好きなことを大切にしようと思った。
- とてもドラマチックで好きだった。家族の愛とそれぞれの思いと、思い出が切なくてかんだうした。
- 友だちが他の友だちと仲良くしているのを見て、悲しくなるけど、睦子は、最後の方で、咲ちゃんとまた仲良くできていて、自分もそういうふうになりたいと思った。
- 人間関係がうまくいっていない人にオススメ。理由は、悲しい気持ちも共感できるけど、睦子のように希望もみえてくるから。

『その声は、長い旅をした』 中澤 晶子／作（国土社）

- 少年たちの心の変化と、さまざまなぞがとてもこまかくて、ハラハラドキドキしたり、ほっこりしたりしておもしろかった。
- 開と翔平のライバル感がすごく印象に残っていて、知らないがっきなどもでてきてとても読みやすい本でした。
- 3人の主人公の中の変声期をむかえた翔平の話が一番心にのこった。翔平が声がでなくなった時間こえた声は、お守りが助けてくれたのだと思う。
- 「声」というのは言葉かなと思ったけど、歌で、聖歌だったからおどろいた。